

学校・家庭・地域がともに取り組む重点目標「自分でよりよい習慣を意識できる子供」
学校・家庭・地域の3者で、自分でよりよい生活習慣を意識できる児童を育成する



ふくろばら

学校だより No. 7

平成30年 7月4日

仙台市立袋原小学校 TEL 241-8521

<http://www.sendai-c.ed.jp/~fukuro-s/>

学校関係者評価委員会を開催しました

6月8日（金）、第1回学校関係者評価委員会が開催されました。

はじめに学校から、いじめ防止の取組、協働型学校評価の重点目標、本校の学校目標について説明しました。特に、いじめに関する話題に関しては、評価委員の皆様からいろいろとご意見をいただきました。

その後、委嘱状交付を行い、給食に舌鼓を打ちながら和やかに情報交換をすることができました。

平成30年度協働型学校評価重点目標

「思いやりの心と自己肯定感をもった子供」

～学校・家庭・地域で、読書活動とちょボラを奨励し豊かな心を育む～

今年度の重点目標は、『思いやりの心と自己肯定感をもった子供』です。それを実現するために二本の柱として掲げたのが「読書活動」と「ちょボラ（ちょっとしたボランティア）」。

まず、読書活動を推進することで、子供たちが豊かな感受性や想像力を育み、目に見えない他人の気持ちや心を推し量る力（思いやりの心）を養っていきます。

ちょボラでは、周囲の人たちを喜ばせたり、助けたり、「自分は周囲にとって有益な存在だ」と感じるような経験を積み重ねます。そうすることで、全ての児童が自分への自信（自己肯定感）を深め、一人一人がそれぞれの個性を発揮して輝ける、そんな魅力あふれる学校を目指していきます。この目標に向かってご家庭と地域の皆様の協力のもと、「チーム袋原」が一体となって取り組んでいきたいと考えています。ご理解とご協力のほど、よろしく願いいたします。

学校で努力すること

ご家庭で取り組んでほしいこと

地域の方をお願いしたいこと

<ul style="list-style-type: none"> ・読書タイムの充実、読み聞かせの実施 ・放課後図書室開放の利用奨励 ・ちょボラの積極的な声かけ ・児童会によるあいさつ運動の継続 	<ul style="list-style-type: none"> ・ノーメディアデーの実施 ・スマホやゲームの使い方のきまりの設定 ・お手伝いの実施と賞賛や感謝のこたげ ・あいさつ、返事の大切さ 	<ul style="list-style-type: none"> ・子供たちへの挨拶、声かけ実施 ・子供たちの様子を学校へ報告・連絡 ・ボランティアとしての関わり ・子供会への積極的支援
---	---	---

袋原小のいじめ防止の取組

5月末に行ったいじめアンケートから、いじめの内容として①悪口・無視・仲間はずれといった対象者に孤独感や劣等感を抱かせるものと、②暴力・命令といった人間関係に優劣や上下関係を感じさせるもののほか、③年々増加し、社会問題ともなっているネットいじめも少数ながら認められました。仙台市教育センターから「いじめ・不登校対策推進協力校」と指定された今年度、これらを解消するために注力する主な取り組みは以下の通りです。

- ① 「認める」「認められる」環境づくり（クラスのとおきの写真1枚を職員室前廊下に掲示等）
- ② 子供たちが良好な関わり方を学ぶ場の工夫（異学年交流、あいさつ運動、地域のボランティアによる放課後教室等）
- ③ 児童を支える学校の生徒指導的な取り組み（定期的なアンケート、児童支援チームによる休み時間の見守り、いじめ対策委員会による速やかな情報共有と組織的な対応等）

学校関係者評価委員の皆様からいただいたご意見

- ・小学校でいじめのあった子の情報共有が重要である。あいさつ運動など、中学生が小学生を見守れる活動等があるといい。いじめには4者（被害者、加害者、傍観者、仲裁者）がある。傍観者が多いのが現状。傍観者対策が必要。中高では、止める子（仲裁者）が多くなっている。
- ・小学校でも「止める子」が多くなれば、いじめの減少につながる。
- ・助けた子が逆にいじめにあうことにつながってしまうのが、今のいじめの実情だと思う。何か手立てはないか？
- ・仲裁する仲間が増えればいい。
- ・仲間作りが難しい。仲間作りが課題である。
- ・子供は良くも悪くも変わる。一番はクラス。担任の役割、クラスづくり（なんでも正直に言えるような）が重要である。保護者の力も必要。懇談会では、保護者の参加が減っている。懇談会の役割は重要である。懇談会での話題が地域にもつながる。
- ・PTA としても、同じ課題を抱えている。どうやって参加率を上げればいいのか。懇談会での話題を発信していくことも大切。いじめ問題については、子供が周りの子と同調してしまう傾向がある。
- ・小学校は、認知学習、認知能力の育成、幼稚園は非認知能力である。子供の戸惑いはないのだろうか。子供たちの思いがどう変わっていくのか期待している。小学校と幼稚園の段差をどうつなげていけばいいのか探していきたい。
- ・別の場所で育っている。児童館、アフタースクール（以下AS）での「子供の育ち」は？
- ・児童館は、5年生までの児童がいる。遊びの場面でのいじめの判断が難しい。じゃれあう、たたきあうという姿が有れば必ず謝らせるように指導しているが、正直「いじめをしているよね」ということを述べるのは難しい。
- ・AS は、異学年の交流ができていてよい。例えばカンフーサークルでは、上の学年の子が「だめだよ」と注意して上げている姿が見られる。すてきなクラスの写真をはるだけではなく、変容等やクラス等で良いことをしている紹介するなど発展させていけるといい。命の大切さという点では、植物への水やり等のお世話を先生方でも力を入れていただけると有りがたい。
- ・植物等の生長を楽しみにできるように、保護者からの生き物等の提供が増えている。
- ・地域として何ができるか。防犯ボランティアなど、通学等の見守りを通して、学校への情報提供をしていきたい。犯罪に対する抑止力の強化をはかっていきたい。

学校関係者評価委員の皆様

地域代表	保護者代表	学校評議員の皆様	
相澤 文典	校長	小学校職員	
今野 美樹	教頭	小学校職員	
太宰 明	教頭	小学校職員	
山口 明男	主幹教諭	教務主任	小学校職員
遠藤 正浩	副教務主任	小学校職員	